

にぎやかな街で

丸谷才一

にぎやかな街で

著者略歴

1925年山形県鶴岡市に生まる。新潟高校在学中兵役に服し、1950年東大英文学科卒。国学院大助教授、東大講師を経て、現在、小説、評論、翻訳等に携わる。

＜著書＞創作「エホバの顔を避けて」「笹まくら」。評論「梨のつぶて」他多数。

＜現住所＞東京都杉並区和田1～57富士見ハイムN503。

にぎやかな街で

定価 六〇〇円

昭和四十三年三月十日 第一刷

著者 丸谷 才一

発行者 上林 吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷 大日本印刷
製本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

目次

にぎやかな街で

贈り物

秘密

155 137 1

にぎやかな街で

わたしがいま住んでいる、このにぎやかな国のこのにぎやかな街よりも、わたしが生れたさびしい国のさびしい村のほうが本当は好きだ。すくなくともあの村は、電気じかけの色とりどりの広告で汚されてなどいなかった。村はずれの家の、街道に面した側に打ちつけてある濃い藍いろの珓瑯^{ほうろう}びきの板に、胃の薬の名が白く染めぬいてあるのが、たった一つの広告だったと思う。その薬の名はどうしても思い出せない。しかし、たしかあの道のあの家の前では、いつも白茶けた瘦せた鶏が二羽か三羽、白茶けた埃にまみれていた。あの家の息子は氣ちがいで、晴れた日にはいつも村じゅうをぶらぶら歩きまわり、いかかわしいことを大きな声で叫んでいた。そしてわたしたち子供はこの若者をからかい、いかかわしいことをどならせては喜んだ。しかし現在のわたしには判るのだけれども、きつとあの男は（今はもうひげの白い、あるいは禿げ頭の、老人になっているだろうか？ それとも死んでしまったらうか？）わたしたち子供

と同様、色気がついていなかったのである。あの村で騒がしいのはただ気ちがいの叫びだけではなかったろうか？ あれは貧しい、しかし静かな村だった。……

だが、わたしはこのにぎやかな街の悪口を言ったことは（妻に対してさえ）一度もない。自分じしんに対してそのことを禁じているような気がする。いま暮しているところが故郷である。わたしはそう思いこもうと努めているのだ。いや、そう言っただけですぐに嘘になるかもしれない。いま暮しているところが故郷。そう思っていると言い直したほうがむしろ正しいのかもしれない。

第一、人間は小さな子供のころ、生れ育った自分の家で、村で、町で、のんびりとくつろいで生きているものだろうか？ すくなくともわたしの場合にはそういうことはなかったし、程度の差こそあれ一般に子供はみな何かに身がまえて、緊張して生きているのだらう。この街の派手な服を着た子供たちも（血色のいい者も、悪い者も）みな必死になって生きているようにわたしには見える。そしてわたしは、いわばそういう緊張をこの年になるまでつづけてきただけなのである。もちろんこう言ったからとて、生れ育った村や町で生きる大人は呑気な暮しが楽しめるなどと、考えているわけではないけれども。

自転車に乗って通りで遊んでいる子供が、途方もなく大きな自動車をよけているところとか、それからこれはもつとずっと幼い子供が汽車のなかなどで母親に抱かれて眠っているところとか、そういう何気ない情景を見かけてわたしは心を動かされる。懸命に生きていると思うから

なのだろう。そういう生き方がわたし自身の生き方と似ていると感ずるからなのだろう。一昨年だったろうか、それとも五年も六年も前だろうか、街なかを歩いているときとかくわたしが立ちどまって子供を眺めがちなことを、なくなった息子のことを思い浮べているせいだと妻が呟いたことが一度あった。それがいつのことかはともかく、息子の話が出たのはたしかにあのとき一度だけである。しかし妻の考え方は違うような気がする。死んだ子供をなつかしむなどという、虚しいことに耽る男ではわたしはない。わたしはただ、あのさびしい村で過したわたしの幼いころを、このにぎやかな街の子供たちの姿に重ね合せているだけだ。あるいはまた、村を出てからさきのわたしの冒険の小型なものを、遊んでいる子供、眠っている子供、叱られている子供に見るだけだ。

わたしは子供のことにこだわりすぎているだろうか？ しかしこれにはいくらか理由がないわけではない。今朝、八時か九時ごろ妻が寢床にはいつて来た。夜が遅いわたしの商売では、いつもこのくらいの時刻のことになるのだ。酔った客のなかには、こういう焼肉を食べれば毎日できるにちがいないなどと冗談を言う者がいるけれども、そしてわたしはたしかに毎日試食しているけれども、せいぜい一週間に一度か二度ではないかと思うし、それも店をしめてすぐにとすることはどうしてもできない。やはり一眠りしてからの朝のことになってしまうのである。終ってから妻は夏の午前の大気のなかでわたしの胸のへんに触り、その感觸を、まるで冷蔵庫から出したバターのようにだと言った。

妻の言葉はわたしをほほえませた。わたしはもとと脂性^{あぶらしよう}だし、それに十年ほど前からはかなり肉がついてきている。そういう肌が激しい動きのせいで汗を浮べ、そしてその汗が冷えたあとの感じは、自分で触ってみてもまさしく冷蔵庫から出したバターのようなのだから。妻は窓をあけ、部屋から出、階段を軋ませて降りてゆく。わたしは自分の胸の肉と脂肪をつまむようにしながら、無表情と微笑のあいだぐらいの顔をしている。この時刻ではまだ涼しいけれども、午後にはきつと八月のなかばの暑さが襲いかかるようにして訪れることだろう。ありがたいことに今日は月に二度の休日に当るから、買出しにはゆかなくてもよい。

……しばらくそんなふうにぼんやりしていたあげく、不意にわたしは、ああ判った、あのときの疑問が解けた、息子の肌の感触はマシマロとかいうお菓子によく似ていたのだ、と思ったのだが、しかしこれはいま考えてみるとすこしおかしい。二十年前には、わたしはマシマロを食べたことはないはずだからである。けれどもわたしはそんなことには気がつかず、長年の疑問が解けたように熱中していたし、ああ判ったと思わず叫んだらしい。階段の下から妻が声を張りあげて、どうしたのかと訊ねた。わたしは何でもないと答え、それから、二十年も昔のさやかな問いへの答がこんなふうにして得られるのはみょうな話だ、第一あんなつまらぬ疑問を忘れなかったのは不思議だと思っただけでも、しかし実を言えばわたしは、まだ母親の乳しか飲んだことのない、よく肥った子供の肌の感じは何に似ているかという問いを、この長い歲月のあいだ何度も何度もくりかえし思い出していたのかもしれない。

それはたしかに自然なことだろう。わたしがこの街に住みついてから、商売の上のつきあいではなくいちばん親しくした男はあの映画館の映写技師なのだし、厳密に言えばそれはこの街に住みつく前からのつきあいで、それにあの男のことはわたしの心を今まで重苦しく悩ましつづけているのだから、はじめて出会った日のことは折りあるごとに思い出し、あれこれと何度も思案したはずなのである。とすれば、わたしが最初に野村と会うすぐ前に考えていたことを、ついでに思い浮べなかつたはずはないように思う。

もっとも野村とわたしとは、会わないときには一月も二月も顔をあわせない。そのくせ会うとなると二日も三日もつづけて、いっしょに喫茶店でコーヒを飲んだり、パチンコをしたり、映画を見たりする。酒を飲むこともあるけれども、それはごく稀だ。やはり映画好きだから映写技師になるのだろう、彼は訪ねて行ったわたしを、まるで薔薇づくりが薔薇を見せるように、嬉しそうにして客席に案内し、たいていは自分も横に腰かけて見物し、喜劇ものときには明るい声で笑ったりするのである。そしてわたしは、これはじつにおかしなことだけれども、殺人犯の出て来る犯罪ものの映画を彼といっしょに見るときなどよりもずっと切ない気持を、彼のそういう屈託のない笑い声を聞のなかで聞きながら味わうのだ。そんなときわたしはかならず、焼肉屋の主人と映写技師との奇妙な友達づきあいのことをどうしても考えてしまう。そして、わたしたち二人のいわば歴史を、いつとはなしに振り返ることになる。……

あれはこの国が戦争に敗けて、その結果わたしの国が属国でなくなった日の翌日のことであ

る。前の日の正午に、わたしはふるえ声の放送を聞かなかった。酒の密造と家畜の密殺が商売である、流れ者の貧しい属国人にとっては当然のことだが、ラジオなど持っていなかったし、第一わたしの小屋には電気は来ていなかったし、それにたとえラジオを持っていたとしても、この国の支配者の声を聞きたいとは思わなかったらう。この国からの命令はすべてなるべく遅れて受けて、しかもなるべく従わないようにする。それがわたしの習性になっていた。

戦争の終り近いころ、わたしはこの街から自転車で一時間半ほどのところに住んでいた。今は街が急にひろがって、あのへんも団地になってしまったが、当時は本当の田舎で、とは言っても、あの故国の村の貧しさとは比較にならぬくらい裕福な、それに何か雑然とした感じの、大きな村だったけれども。いや、正確に言えばわたしはその村の住民ではなかった。村から少し離れた川のほとりの国有地に、勝手に小屋を建てて暮らしていたのである。村の人々はわたしを黙認していた。もちろん彼らが属国の男を怪しまなかったはずはない。しかし肉も酒も手に入れることがむずかしいあの時代に、彼らはわたしのような職業の者を必要としていたのだ。わたしが聞かなかったふるえ声の放送があつてから、ほぼ二十四時間のちのこと、わたしは小屋の外に蕙むしろを敷いて坐り、川風に吹かれながら赤ん坊をあやしていた。頭上ではひよろ長く伸びた松の樹が、午後の激しい日ざしをさえぎっている。妻は洗濯をしている。赤ん坊は妻に抱かれているときよりもよく笑った。わたしは、この柔かくてしかし弾みのある肌感じはいい、何に似ているだろうとぼんやり考えていた。そのとき白いシャツを着た若い男が、一頭

の小牛を連れて、土堤の上の白い道を歩いて来たのである。牛の扱い方が下手なので、疎開して来た街の者にちがいないとわたしは判断した。十日ほど前の爆弾でやられて逃げて来た罹災者だとは考えなかった。進みながら小さい小牛を歩かせることに閉口はしていたけれども、ここにも怪我はしてなくて元気そうだったからである。

若い男は土堤から降りて、わたしのほうへ近づくと、

「高井さんですか？」

と訊ねた。美男でも醜男でもなく、大男でも、しかし貧弱な体つきの男でもない、ごく平凡な若者である。年はわたしと十ぐらい違うだろうか？　そしてわたしは、自分の国がもう属国ではなくなったことにやはり興奮していたのかもしれぬ、言わなくてもいい余計なことを答えた。

「昨日までは、ね。今日からは……昨日の昼からは、高ということになるんじゃないか」

彼はわたしのそういうへらず口を相手にしないので、小牛を密殺してくれと頼んだ。わたしは承知し、しかし今までのように、肉を取った残りの頭や足や臓物だけが謝礼では困る、そのほかに金もいくらかもらいたいと言いつ添えた。この数日、密殺を頼まれることがつづいて、暑いさかりにいささか持てあまし気味だったし、それにこの模様ならまだまだ注文がつづきそうだと考えたからである。若い男は当惑しながら汗を拭いていた。松の樹の影が、彼の顔を染めたり染めなかったりした。泊っている農家の主人に頼まれたのだが、金のことは聞いて来なかつ

た。どのくらい払えばいいのかと彼は訊ね、相談が長引くと思ったのだろう、小牛の綱を松の樹につなぐ。じきに殺されるはずの獣の瞳は、灰いろの瓦のような色をしていたし、尻はきたならしく汚れている。そのとき妻が来て、わたしから赤ん坊を受取った。男は赤ん坊の顔をひよいとのぞきこむようにして、

「よく似ている」

と呟き、それだけではまだ足りないみたいに、

「まるで、高さん、あなた一人でこしらえたみたいじゃないか」

とわたしに笑いかけた。わたしも妻も笑った。みょうな話だが、わたしはそう言われたとき、何か褒められたように嬉しく感じたのだ。

しかしわたしが密殺料としてほんのすこしの金額しか言わなかったのは、もちろんそのお世辞を喜んでいいではない。今日は最初だからこのくらいいい、明日はもうすこし高くし、明後日はまたもっと釣りあげようという気持ちだったのである。そして若者はその値段を聞くと安心したようにうなずいた。肉は何に入れて持ってゆくのかとわたしが訊ねると、あとからリヤカーを押して追いかけて来るはずだ、と彼は答え、振返って、土堤の上の長い道を眺める。わたしは、この牛ではそれほどたくさんは肉が取れないと断ってから、獣を連れてその場を去った。若者は今までわたしが坐っていた藁の上に、わたしと小牛に背を向けるようにして腰をおろした。

小牛に暴れられて、かなり仕事に手間どってから戻って見ると、思いがけないことに、薙には彼と並んで女が腰をおろしていた。疲れているのだろう、二人は黙りこくっている。そのそばにはリヤカーが一台、置いてある。

「終ったぜ。男の人が来るのかと思っていたから、びっくりした」

とわたしは声をかけると、彼らが振向き、女が大げさな悲鳴をあげて男に抱きついた。わたしの頬に返り血がついていたためである。その若い女がなかなかの美人であるだけに、わたしは自分の職業を嫌われたような気がして愉快でなかったが、しかし我慢して微笑を浮べ、親指の腹で血を拭いた。手と指はいちおう洗ったが、顔を洗うことは忘れていたのだ。

男は抱きつかれて困っている。女はすぐに男から離れ、詫びるようにわたしに笑いかけた。

肌が白くて眼の大きい、明るい顔だちの、二十歳ぐらゐの娘である。濃い目に口紅を塗ればさぞ映えることだろう。わたしはしばらくのあいだ女を見おろしていたが、やがて男に眼で合図をした。男がリヤカーを押してついて来る。娘のほうはもちろん、薙に腰をおろしたままである。わたしは石ころと砂と、それから丈が^{せう}高く伸びた雑草の小径を歩きながら、この二人はとうに出来ている仲だろうと思った。つまり逆に言えば、夫婦ではあるまいと察したわけである。

「きれいな人だね」

と言いながら、わたしが立ちどまって身をかがめたとき、彼は呻くような声を後ろであげた。彼は小牛の死骸を見て蒼ざめていた。肉や臓物やそれから砂地に溜っている血には、いつの間

にか蠅が集つて来ている。わたしは車を彼の手から引き寄せ、

「なるほど、厭な感じがするだろうな」

と呟いてから、肉を新聞紙で包んで、車の上の箱に入れてやる。

「胃袋四つのうち、二つぐらい持つてゆかないかい？ 表の黒い皮を剥いで、裏の脂身も剥いで、ゆでて食べるとうまい」

とすすめても、持つてゆこうとは言わない。黒ずんだ紫いろのつやつやした塊を、気味わるそうに見まもるだけである。もつともこれは、当時この国の人々はみなそうで、魚となるとあんなに上手に食べるのに牛や豚は肉の部分しか食べようとしなかったのだ。

「商売は何だい？ 会社員？」

と訊ねると、

「映画館に勤めてます」

と彼は答え、映写技師をしているのだが、もちろんその勤めさきはこないだの爆弾で焼けてしまった、と説明した。彼はあの日の前日からこの村に来ていたのだが、翌朝まばゆい光と茸型の雲に驚き、村の救援隊のトラックに乗せてもらって街へ帰って、家も映画館も焼け失せているのを知ったのだそうである。映画館はカモフラージュのため屋根が黒く塗っており、そして彼の家の屋根はもともコールタールを塗っているので、燃えやすかったのだらうと男は言い添えた。

「一日ちがいで、運がよかった」

とわたしは祝福してから、ところで家族の者はみな無事だったのかと訊ねた。男はほんの一瞬间ためらったあげく、妻が死んだと答えた。

「ほう、それはどうも」

わたしはそう呟きながら、しかし妻の死のちにすぐ、あんなふうにして若い女といちゃついているのはすこし不謹慎ではないか、と思った。わたしはそういうことにあまり厭しい考え方をする男ではないから、ひよっとするとあのとき、リヤカーを押して来た若い娘がきれいなせいで彼に淡く嫉妬していたのかもしれない。

男はわたしに金を払い、石ころと砂と雑草の小径をまた戻ってゆく。本当ならそこで別れてもよかったはずなのに、わたしがあとからついて行ったのは、もう一目あの娘を眺めたいという気持があったからのようである。わたしは男に対してだけではなく、薙から立ちあがりかけた娘にも呼びかけるようにして、酒も買ってゆかないか、安くまけておくからと言った。男は断った。女は、

「この肉だって、あたしたちのじゃないのよ。宿の人に頼まれただけなの」

と言って、立ちあがるのをやめ、今度はわたしを無遠慮な視線で見ている。もちろんわたしも彼女を見ることをやめない。そして娘の表情には、何かこうして男に見られていることを楽しんでいような気配があった。